

齊曲へそまかり新友

卷一

藤沢国平短篇傑作選

藤沢国平短篇傑作選 卷一

齊曲がり新左

文藝春秋版

藤沢周平短篇傑作選（巻一）

へそま  
臍曲がり新左

昭和五十六年九月三十日 第一刷

昭和五十六年十月二十五日 第二刷

著者 藤沢周平  
（かたさわしゅうへい）

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三・二三  
電話代表（〇三）二六五一一二二一

定価 一三〇〇円

印刷所 凸版印刷  
製本所 中島製本

万一、落丁・乱丁の場合は  
お取替え致します

# 目次

竹 冤<sup>えん</sup> 一 臍<sup>へそ</sup> 証 紅  
光 顆<sup>か</sup> 曲<sup>ま</sup> の  
始 の がり 拠 記  
末 罪<sup>ざい</sup> 瓜 人 憶

一 三 九 七 七 七

遠方より来る

二五

雪明かり

二五

小川の辺

二五

木綿触れ

二七

夢ぞ見し

二九

「美德」の敬遠

三五

装丁 谷澤美智子

臍<sup>へそ</sup>  
曲<sup>ま</sup>  
が  
り  
新  
左

藤沢周平短篇傑作選  
卷一



紅  
の  
記  
憶



一

揺り起こされて眼覚めた。

開けた眼に、いきなり眩しい光が突き刺さり、麓綱四郎は思わず顔を顰めた。頭が痛い。その痛みで昨夜泥酔して帰り、父の六郎兵衛に叱責されたことを思い出した。ぎょっとして眼を開いたが、夜具のそばにいるのは父ではなく、妹の登和がちんまりと坐り、大きな眼で綱四郎を睨んでいる。

「もそっと、穏やかに呼び起こすものだ」

綱四郎は登和に文句を言い、夜具から両手を伸ばして欠伸をした。登和はまだ十二で、男のように気性が活発な娘である。綱四郎に文句を言われて、ぶっと膨れると、「呼んでも起きなかったんですよ。兄様、もう何刻だと思っていらいっしゃるんですか」と言った。

「さあ、何刻かな。明るいかもう夜じゃないなあ」

「まあ呆れた。もう四ツ（午前十時）ですよ」

「そうか。そいつは都合がよかった。俺は今日は四ツまで眠っていようと思ったのだ。いいときに起こしてくれ」

「まあ……」

登和は兄を睨んだが、その口もとにはもう笑いが生まれてかけている。登和は、不良で怠け者で寝坊で、その上いつも面白いことをいう次兄が好きなのである。

登和を横目で窺いながら綱四郎は言った。

「起こしかたがあんまり荒っぽいから、さっき俺は熊でも起こしに来たかと思ったよ」

登和は吹き出したが、慌てて口を掌で覆い、可愛い咳払いをして行儀を繕おうとした。母の音江から、いつも口喧しく「女の子らしくしなさい。そうでないと嫁にもらってくれる人がいませんよ」と言われている。父の六郎兵衛も、長兄の満之丞も、気難しい顔をした大人で、登和の遊び相手になってくれるような人達ではない。次兄だけが面白いことを言うが、調子にのって騒ぐと、母に叱られる。

綱四郎は、また長い欠伸をした。やはりまだ頭が痛む。昨夜作並道場の仲間と菱池茶屋で飲み、荒れた。そのせいである。

障子には明るい日射しが溢れ、軒近くまで伸びた梅の若葉が、薄青い照り返しを障子に投じている。外はいい空模様らしかった。だが綱四郎はまだ寝足りない気がした。

「もう一眠りしてはいかんか、登和」

「いけません」

登和はかぶりを振った。

「そんなこと言うと、これをお見せしません」

「何だ、何か持っているのか」

「お手紙です」

登和の茶色っぱい眼が笑った。手を後ろにまわしている。そこに手紙を隠しているらしい。

「それも女の方からの手紙」

「女？ 誰だ？」

「まあ、わかりませんか？」

登和は大げさに顔を顰めた。

「誰からですって。加津さまに決まっているじゃありませんか。それとも、ほかに心当たりの方がいらっしゃるんですか」

登和は生意気な口を利いた。

「何だ、殿岡の鼻べっちゃか」

「呆れたお兄さま。ご自分の奥さまになる方を、そんなふうにおっしゃるなんて」

登和、いつまで何してますか、という母の音江の声がかえった。甲高い声である。

「はい、ただいま」

登和は声を張って答えてから、

「あのとおりお母さまは怒っておいでですからね。起きないと叱られますよ」

と囁き、肩をすくめて部屋を出た。

「おい」

その後ろ姿に綱四郎は半身を起こして声をかけた。

「父上はいるのか」

「寄合い、寄合い」

振り向かず登和は答えた。

「よし、いい按配だ」

布団の上に胡坐をかくと、綱四郎は登和が置いて行っ

た手紙を拵げた。

加津の手紙は、今日の昼過ぎ、殿岡村の菩提寺で簡単な仏事を行なう。ついては突然ながら内密の話もあり、ご足労願えたら有難いと書いてあった。達筆だが、ただそれだけの文面で、女が寄越した手紙らしい情緒を思わせるようなものは、何もない。

綱四郎は眉を寄せた。文面のそっけなさから、殿岡父娘の堅苦しい表情を聯想し、うんざりしたのである。

加津は家中の殿岡甚兵衛の一人娘で、綱四郎はそこに婿入りすることになっている。春先に結納を交して、この秋には婚儀を行なう運びになっていた。殿岡の家は、もともと城下から三十丁ほど南にある殿岡村を支配していた地侍の家柄で、藩祖の青楓公が入部してきた折に、甚兵衛の祖父が召し抱えられて藩士となった。甚兵衛は二百石を喰み、物頭から、一時は進んで大目付まで勤めたが、三年前に役を退いている。

甚兵衛の連れ合いは早く病死し、子供は娘の加津ひとりだった。他に子供、がいな淋しさのためか、甚兵衛は、娘に男子に施すような躰を加えた。漢籍を読ませ、乗馬、小太刀を仕込んだ。加津に剣の才能があるのを見ると雉

町の日詰道場に通わせ、一刀流を学ばせた。加津が一年、そこで目録を受けた噂は、藩中の若者たちを刺戟したものである。

高名になった分だけ、加津は婚期が遅れた。美貌でなかったせいもある。綱四郎との縁談がまとまったとき、加津は二十になっていた。

手紙を放り出して、綱四郎はもう一度横になった。執拗に頭が痛む。すると昨夜のことを思い出した。

菱池茶屋は三ノ曲輪西端れにある。樹木に包まれた古池のそばにある茶屋は、場所が閑静なのが喜ばれて、家中の者がかなり出入りする。昨夜そこに作並道場の者が十人足らず集まったのは、道場仲間の江守倉之助が、脱藩して江戸に上るのを送別するためだった。日頃素行のよくない、飲み友達が集まったのである。

江守の脱藩は、正式に藩に願ひ出て許されている。次、三男の離藩には、藩では寛大だった。

「これで悪い仲間と縁が切れると思うと、俺はせいせいする」

酒が回った江守はふざけて、みんなを笑わせた。剣術の方は見込みがないから、江戸に出て学問で身を立てる

つもりだと、江守はやや興奮した顔で言った。

「自信のある奴はうらやましいのう。俺なんぞは、どうにも身の立てようもないからな。酒で身が立つという口があったら、誰か教えてくれ」

時田市蔵が言った。みんなが笑ったが、時田はさらに言った。

「麓はいい。もう殿岡の婿だからな」

「まだ婿入りしたわけじゃない」

と綱四郎は言った。

「同じことではないか。俺も腕に自信があれば申し込むところだ。先さまの顔はこの際聞わん」

明らかに侮辱だった。時田は絡んできていた。綱四郎は作並道場創始以来の剣士と言われ、師範代を勤めている。時田は同じ時期に入門したが、太刀筋が悪く一向に上達しないまま、近頃は修業も怠けていた。

綱四郎は黙って盃を呷った。時田が加津を侮辱したことは解ったが、それほど腹は立たなかった。加津は醜婦ではないが、顔立ちは十人並みとも言い難い。それを指摘されて腹を立てるほど、綱四郎はまだ加津に関心を持っていない。

殿岡との婚約は親同士で決めたものである。父の六郎兵衛も兄も、綱四郎の身を固めるのをいそいでいた。満之丞が三ツ上の二十五で、嫁を迎える時期が来ている。

綱四郎がここの二、三年菱池茶屋などに入入りして、仲間と飲んだくれたり、女遊びをしていることを二人とも知っていた。嫁を迎えるのに、剣術が強いばかりで、素行の香ばしくない次男が、家の中にごろごろしているのは好ましくないのだ。加津との縁談は、当人同士の承諾などということもなく、一方的に押しつけられていた。

加津に会ったのは、結納が済んだ後である。二度ばかり殿岡の家に招かれた。

一度は茶を招ばれ、次には酒を招ばれた。二度とも殿岡父娘の印象はいいとは言えなかった。

綱四郎は茶道の作法など知らない。甚兵衛と並んで、茶を点てる加津の、もつともらしい手捌きをぼんやり眺めていただけである。加津をみたのは、この時が初めてだった。肉が薄く、白い顔の頬が瘦せていた。眼が細く、薄い唇だった。顔には化粧の気配がない。

日詰道場の女剣士という噂から、綱四郎は骨格のいかつい、顔も男のように黒い女を想像していたがそれは違

った。加津はどこにでもいるような平凡な容貌で、むしろ肩のあたりが瘦せて繊弱な感じさえした。

甚兵衛から回ってきた茶碗を受け取ると、綱四郎は二口で飲み干してしまった。香ばしい苦味が口に残ったが、うまいとは思われなかった。

妙な顔をしていると、加津が白い顔を向けて言った。

「麓さまは、茶は嗜まれませんのですか」

「無調法でござる」

「それではいずれ、私をご指南申し上げます」

加津はにこりともしないで言った。甚兵衛は咳払いをした。

酒を招かれたときも、綱四郎は窮屈な思いをしている。父娘で藩政がどうのこうのと、激越な口調で喋り、意見を求められて閉口した。綱四郎は、これまで藩の政治むきのことに興味を持ったことは一度もなかったのである。

殿岡父娘に対して、綱四郎はむしろ鬱陶しい感じしか持っていなかった。酔ってから逆に時田に絡み、座敷の中で組み打ちまでしたのは、それでもやはり、時田の侮辱が胸に残ったためだろうかと痛む頭をもてあましながら、綱四郎は思った。

時田の気持は解っていた。剣でも学問でも、格別頭角を現わすということもなく、婿の口もないときは、家中の次、三男は日陰の部屋住みとして、一生生家に寄食するしかないのである。

だが、時田の嫉みは当を得ていないのだ。

——婿がそんなにいいわけもないさ。

綱四郎は欠伸をして起き上がると、もう一度加津の手紙を拾い上げた。

## 二

豪勝寺は、殿岡村の一番奥まった場所、丘の麓にある。綱四郎がついた時、時刻は七ツ（午後四時）を過ぎたようだった。眼に濃淡さまさまの緑を映してくる野道を歩いている間に、頭の痛いのが癒えていた。

山門を潜り境内に入ると、石畳みの左右から楓の嫩葉が頭上にさしかけ、微かに匂った。あるいは殿岡父娘は帰ったかも知れない、と思いつながら来たのだが、本堂に進むと、右手の庫裡の入口に駕籠がひとつ休んでいるのが見えた。

豪勝寺は禅宗の寺である。背後になだらかに起伏する

丘に、抱きかかえられた位置にあつて、本堂のほかに客寮と棟続きに庫裡があり、本堂の左手には鐘楼がある。かなりの規模だが、人声もせず建物は森閑としていた。

不意に客寮の戸が開いて、女が出てきた。殿岡の家の下婢だった。

「遅くなった」

綱四郎が言うのと、三十過ぎの肥った下婢は微笑して、お待ちかねでございます、と言った。

戸を入ると段があり、高い床に上がると廊下が左に続いている。よく磨いた廊下を右に曲がると、そこには日射しが踊っていた。見おろす位置に広い庭があり、枝葉の大ぶりの庭樹の間に、苔むした石と池が見えた。池には沢山の鯉が群れている。

「こちらでございます」

下婢は廊下に跪いて障子を開くと、綱四郎を招き入れ、すぐに足音もなく去って行った。

部屋の中に加津がいた。加津は小机の上に紙をひろげ筆を動かしていたが、綱四郎をみるといそいで筆を置いて立ち、小さく切った炉のそばに坐った。

「突然のお願いでございましたゆえ、いらっしゃらない

かと思いました」

と加津は言った。刀をはずして、胡坐を組みながら、綱四郎は訊ねた。

「父上はいかがなされた」

「ひと足先に帰りました」

加津は言い、首を傾けて言った。

「お酒を召し上がりますか」

「酒？」

「父と、ここのご住持どのが酒を汲まれて、あなたさまの分も用意してございます」

「……」

「あの節はあまりお飲みになりませんでした、麓さまは酒も女子もお嫌いではないとうかがっております」

加津は顔を挙げて微笑した。その顔を見て、綱四郎はおや、と思った。軽い驚きが心の中にあつた。

加津は薄く白粉を使い、唇に紅をさしていた。唇に馴染まない感じの紅のいろが、ふだん加津が化粧馴れしていないことを示していた。その稚拙な化粧が、かえって加津を女らしくしている。驚きはそれだけではなかった。加津に会うのは今日で三度目だったが、笑顔を見たのは